

スケッチ II 奥西正史

東山トンネル (山科区川田岩ヶ谷)

# 小説『清水焼風景』 に重要な役割

藤田 洋

(東山の福祉と革新の源流を  
探る会 事務局)

日本のトンネルには珍しいとされる単線並列の東山トンネルは、1921年8月1日の開業です。当時の入口部の構造物は消失してしまいましたが、都市の景観に配慮して同一意匠で設計された上下線一体構造の華麗な技巧の限りを尽くした坑門でした。トンネルの額には「如砥如矢、品物咸亨」(砥のように矢のように品物これを享受する)と記され、産業輸送の向上と清水焼の繁栄を願う鉄道輸送の革新を謳ったものでした。

谷口善太郎は京都に働くことを決めて、この年の3月に出てきています。下宿先の妙法院前側町から蛇ヶ谷の陶器工場に通う道筋なので華麗な東山トンネルを、いろいろな

〈この1枚〉3・25京都市民総決起集会 1973年 湯浅 俊彦 2  
〈忘れ得ぬ〉川口是さんのこと 革新統一への執念と尽力 湯山 哲守 3

〈BOOK〉藤沢薫著『わが芝居人生』 佐藤 和夫 7  
嵐の中の赤いバラと蛭川虎三

〈研究ノート〉京都婦人同盟の成立と女性たち 井上 とし 9  
②京都婦人同盟の発

〈私の一期一会〉「京大・滝川事件」 佐藤 和夫 11  
1937年夏―それぞれの余波―

例会案内/会員消息/編集後記 16

京都の民主運動史  
史跡散歩<sup>24</sup>

思いを持って完成前の姿から毎日見たことでしょう。またこのトンネルは故郷の石川加賀へと続く道でもあるのです。

トンネルの真上にあたるのが今熊野蛇ヶ谷です。ここは第一次世界大戦後に全国の陶磁器生産地から職人たちが集められたところです。東山トンネルもそれと合わせて建設され、工夫たちが全国や朝鮮からも集められ長屋もあつたようです。陶器職人たちは陶磁器製造を競い合いながら、トンネルを通る列車の振動を体で感じ、その先の故郷を思い出すこともあつたといわれます。そして「一家心中」とトンネルの存在は切り離せないことでした。前



京都文学館設立を求める会の文学散歩で案内をする藤田さん

途を悲観する業者や生活苦の職人一家がトンネルの上から飛び込むという身投げ場だったのです。多発する自殺に、巷間で「鉄道往生」と呼ばれました。こうしたことは、ここで暮らした谷口善太郎自身の脳裏に染みつく体験でした。

小説「清水焼風景」は、冒頭に地域の情景が、まるで映画のワンシーンを

みるような臨場感あふれる筆致で描かれています。そして「トンネル」という言葉をこの箇所だけで四回も使った。この方向を讀者に予感させました。

冒頭に続く展開は、蛇ヶ谷の全景を眺望する所からまるでズームレンズを使うように地域の人々を追いつつながら、京都陶器職工組合の総会場にたどり着き、労働者としての成長する姿へ導く

魂こめた」記念碑的作品です。

## 蜷川7選勝利へ全府から4万人

3.25 京都府民総決起集会  
1973年 府立大学グラウンド

## この一枚

〔連載〕



春まだ浅き3月25日、小雪のちらつく府立大学グラウンドを埋め尽くして開かれた「蜷川民主府政と革新統一戦線の発展をめざす府民総決起集会」には、丹後から南山城から全府4万人が集まった。

社会党府本部が大会で蜷川府政批判を展開、自民・民社・公明とともに、大橋和孝府本部委員長・参議院議員を知事選に擁立したため、危機感に燃えた民主勢力は空前の大集会を計画、このメーデー規模の大集会を成功させた。

「北山をかきくらすして雪雲がおそいかかってくれば、烈風とともに小雪や霰がふりしきり、髪の毛からのぼりから、一切のなびけるものは悲壮に四十五度以上になびき、顔の皮もバリバリに凍りそう、しかし誰ひとりとして不平を鳴らす者はいない。……蜷川知事は獅子吼し（いや、虎吼というべきか）、そして蜷川民主府政の危機にあたり、より一層の団結をよびかけた。寿岳章子さんは京都府市民団体協議会『10年の歩み』（1977年）の中でこう綴っている。

翌年4月の知事選では4500票の僅差で蜷川知事は勝利した。

（湯浅俊彦）

写真Ⅱ集会后2コースに分かれての市中行進。今は亡き労組幹部の顔も見える。

# 忘れ得ぬ人

## 川口是さんのこと

湯山 哲守

京極・春日9条の会事務局長  
元京大人間環境学研究所講師

川口是さんは1982年4月、京大教授を辞して京都府知事選挙に立候補して敗北しました。その4年前、蛭川さんの後継者としてやはり京大教授から立候補して敗北した杉村敏正さんに続き革新派2度目の敗北でした。その川口さんは1992年2月1日に亡く



川口氏が立候補した1984年の知事選挙

なりました。2月18日の65歳の誕生日を前にした逝去でした。京大職組委員長を2度務めました。1度目は「大学紛争」と遭遇し、京大「5者共闘」の議長を兼務しました。2度目は京都市公（京都国家公務員労働組合共闘会議）議長の兼務でした。いずれの「委員長職」においても、あのすらすらとした容貌と共に、分かりやすく爽やかな演説と緻密な運動の指導によって、絶大な人気と信頼を得ました。その声望は京都労働運動においても、広がっていました。そして、あの82年知事選挙「革新の統一」をめざして10ヶ月間、獅子奮迅の活動を展開した後、最終的に自ら知事候補として出馬しました。忘れ得ぬ人です。

### 1. 深草墓園での奇遇

2006年1月31日、深草の市営墓地「深草墓園」の坂道を登っていくと、納骨堂の方からハーモニカの伴奏に合わせた「赤旗の歌」が聞こえてきました。

翌2月1日は元京大教養部教授の

川口是さんの14回目の命日でした。筆者は、京大教養部の元職員の方2人と一緒にお参りに来たところでした。毎年この日前後にお参りして昼食をとにもするという慣行を続けてきていました。いつものように白亜の納骨堂への階段を上がって祭壇に近づいていくと、10人ほどのかなり年配の方々が唱和していたのです。「誰のお参りであろうか？『赤旗の歌』とは！

名のある方かもしれない。ひよっとして知っている人かも」と思いつつその方々のお参りが終わるのを待ちました。そして私たちもお参りをと祭壇に近づきつつ、念のため声をかけました。「失礼ですがどなたのお参りですか？」と。ハーモニカを吹いていた方が即座に答え始め、合わせるように皆さんが一齐に「私たちの恩師なんです。川口是先生」。私たちは驚きました。その奇遇なことと併せて皆さんの高齢ぶりを。そしてさらに小学生が恩師のことを伝えようとするような初々しさにです。分かったことは、川口さんが「日本国憲法」担当・講師として最初に赴任した1950年代始め、神戸市外国語大学二部に学ばれ、川口さんの薫陶を受けられたとのことでした。講義だけでなく、社会への関わり方や人生観についても親しく学ばれ、多くの方は学生自治会の活動家でもあったとのこと。昼間働きながら学ぶ学生に対して川口さんはことさらに思い入れを強くされていたようでした。仲人をして

もらったという方は、ほとんど年の変わらない仲人だったと楽しそうに話されました。その日は川口さんの奥様と昼食をとにもされる予定とのことでした。自己紹介をされた代表格の方の名前は私が編集に関わった川口是さんの『追悼文集』中にかすかに記憶がありました。翌年は命日当日にお参りしましたが、またもや彼らと一緒に期せずしてよく一緒になりました。そして何年後だったか一緒に折は、たった2人とそのご夫人だけとなりました。何人かの方は入院されたりで欠席されているとのことでした。このようにいつまでも子弟たちに心から敬愛され続けている情景は、目の当たりにする度に胸が打たれました。しかし川口さんの人柄を知る私たちとしては大変よく理解できることでした。私たちも同じ思いだったからです。その後年賀状を交わしていましたが何年前に皆さん鬼籍には入られたと知らされました。

### 2. 「革新統一」実現への執念

川口是さんは本誌読者の大方はご存知と思いますが、1982年の京都府知事選挙に京都大学教授を辞して「革新陣営」から立候補して落選したその人です。現職・林田悠紀夫65万6千票に対して川口38万8千票。政党別では林田陣営の自民党、民社党、公明党にたいして川口陣営は共産

党だけでした。社会党は独自候補を立てず自主投票となりましたが、かなりの「社会党票」が川口さんに投ぜられたといわれます。それには理由がありました。

選挙前年の6月18日府民大集会（新しい民主府政をつくる六・一八府民大集会）の前日、川口さんは「京都市府政各界連絡会議（民主府政の会）または「各界連」と略す）から知事選挙への出馬要請を受けました。彼は出馬表明を留保しつつ「革新統一の長い列車の連結器になりたい」と宣言しました。早速寄せられてきた労働組合や市民団体からの「出馬要請」に対しては「返事」を用意していました。「御要請は肝に銘じておきます」と同時に、一八日夜の集会の席上、『見切り発車の機関車でなく、革新の長い列車の連結器（つなぎ目）になりたい、もっと性能の良い連結器があればいつでも取りかえて下さい』と申しあげた意のあるところをくみとって下さり、革新統一の実現にむけて社会党や総評への要請などをふくめ『統一と団結』のためのあらゆる手だてを講じて下さるよう、お願いしたいと思えます」と。当時、かなり困難な状況にあった「社共共闘」の道を何とか切り開こうとしていたのです。その後の半年間、最後の最後まで、それを実現しようと、全身全霊を傾けて、「もっと性能の良い連結器」を求めて精力的に行動しました。

社会党が1980年に行った公明党との共同をめざす「社公合意」は共産党との共同を拒否する宣言でもありました。京都では70年、74年の府知事選挙における「社共共闘」を最後に、社会党は共産党との共闘に背を向け、78年選挙では独自候補を擁立することによって「自公民」府政の成立、すなわち「民主府政の落城」に手を貸してしまったのでした。しかし川口さんは、82年府知事選挙においては、日本全体の政治動向を憂慮して、なんとしても京都において「社共共闘」を回復・実現し、全国的な革新統一実現につなげたいという執念を持っていました。その試みが万が一うまくゆかない場合は当然「最後の責任」を果たす覚悟は持つてはいましたが、ただ「自分が出るときは負けるときだ」という悲壮感を抱いており、そうならないように「全力」を尽くされたのです。

立場を履行したというものでした。4者の要請を寿岳さんが固辞し、川口さん自らも重ねて寿岳さんを説得しましたが実らなかつたという事態を受けて、社会党側から前回（78年）選挙の行きがかりを捨てて（対決相手だった）「杉村教授でまともでないか？」という提案がなされるに至りました。社会党・総評は揃って杉村さんに直接要請を行いました。固辞されてしまいました。4者揃って杉村さんに要請しましたが、やはり「固辞」されてしまいました。川口さんも2度にわたり直接要請しました。すでに6月段階で、（立候補を要請された）川口さんから各界連に「要望書」が出されており、その中で、「私は杉村さんの『代打』だ。4年前、社会党候補と対決した経過から杉村さんでは統一することが不可能な場合は自分が『代打』を引き受ける」旨を述べていました。そのことは各界連顧問の杉村さんも承知されているはずだということで、杉村さんに強く要請したのでした。それにしても「杉村さんに社共が共同で要請する」という事態は画期的なことでした。しかし杉村さんの固辞は覆りませんでした。実は4年前の知事選直後に「次回は出ない」という杉村さんの「思い」を各界連と共産党は「了承していた」のでした。しかしそのことは川口さんにこの

ときまでは知らされていなかったのです。それを知ったときの川口さんの落胆と不信感は大変なものでした。しかし寿岳、杉村両氏への要請という点において社共が「統一」したことの意義は大きなものでありました。最終的に川口さんが立候補した後の社会党・総評の内部で大きな論議が展開されることになったのです。この項は、川口著『憲法と暮らし』（1982・10・2、現代紫明社刊）を参照しました。

### 3. 知事選挙出馬へ

川口さんは、最終講義・単位認定を終わった後の翌年2月28日付で京都大学教授を辞職、3月3日出馬表明記者会見を行いました。

「川口色」はその「公約」に現れました。「府のすべての施設に、ふたたび『憲法を暮らしの中に生かそう』の垂れ幕をかかげる」と並んで「京阪奈研究学園都市の中心に『平和のための戦争記念館』を建設する」、「教育委員の準公選制と40人学級の実現をはかる」など5本立てでした。演説の中ではさらに政府の減反政策の忠実な実行者だった農林官僚出身の林田知事を想定し、「壮大な」提案もしました。「兵器を作らず米を作ろう」です。常々「減反せずに作った米は、飢えに苦しむ国々に『無償』で送ろう」という理念・政策を著書などで展開していました。米などの食糧を無償で提供する国が万が

## 革新統一実現への執念と尽力

一「侵略」を受けたら世界が黙っては  
いないでしょう。これは強力な「安全  
保障」、強力な安保政策といって良い  
ものです。上記のスローガンにはこの  
ような理念が込められていたのです。  
川口さんの考えは「食糧安保論」とい  
うことで共産党の故・上田耕一郎氏が  
関心を寄せていたと聞きました。これ  
らはしかし「民主府政の会」の中では  
十分に議論がされなかったように思わ  
れます。5つの「公約」の中では、『平  
和のための戦争記念館』は日の目を見  
ました。各界連の重鎮であり、川口さ  
んと肝胆相照らす間柄にあった中野  
信夫さんが提唱されて、同じ頃から始  
まっていた「平和のための戦争展」の  
常設展示場として、立命館大学に「国  
際平和ミュージアム」が建設されるこ  
とになり、同氏が多大な貢献をされた  
と聞いています。

残念ながら川口さんは知事選挙そ  
のものには敗北しましたが、選挙戦の  
中では、その粘り強い「革新統一実現  
への執念と尽力」に対して社会党およ  
び同党と友好的な総評傘下の労働組  
合の中で川口さんへの好感が広がって  
いました。4つほどの社会党京都府本  
部「総支部」が推薦決定を行い、それ  
らを背景に京都府本部執行委員会は  
「川口推薦決定」をするかどうか裁決  
をしました。結果は同数で決まらず、  
委員長裁定となり結局「推薦しない」  
〔自主投票〕とされたとのことでした。  
当時私は京都大学職員組合の副委



員長を務め、知事選を担当していま  
した。私の知人が親友とのことで紹介さ  
れ、府本部の書記次長T氏と面談・懇  
談し、川口さんの推薦を要請したこと  
を思い出します。社会党系の雑誌「学  
習運動資料」(75号、1982・7・1)  
所収の鴨野長久「革新府政奪還への道  
を求めて―京都府知事選挙敗北の教  
訓と問題点」によれば、「下部討議の  
結果は、25総支部中、上申があった19  
総支部の中で、『川口単独支持で闘え』  
が11総支部、『自主投票』が2総支部、  
他は『大勢に従う』。…府本部執行委  
員会の内部も川口支持が過半数を占  
めた。」とのことでした(前掲『憲法  
と暮らし』219頁)。

#### 4. 知事選敗北の後

川口さんは知事選出馬まで18年間、  
京都国公の議長職を努めました。知  
事選挙後「顧問」となっていました。  
「土光臨調」を使った中曽根政権の下  
で1987年3月末を期して「国鉄」  
を解体する「国鉄民営化」が急ピツ  
チで「仕上げ」に掛かっていました。  
また同時期には、1987年11月の総  
評、同盟など労働4団体による「連合」  
の結成が日程に上っており、日本の労  
働運動が一挙に右傾化を完成させてい  
く情勢でした。日本全体の右傾化への  
「大きな曲がり角」に立って、川口さ  
んの危機感尋常ではなく、国鉄解  
体と労働戦線の再編をめぐって「京都  
からのアピール」I、II、IIIが出され  
ましたが、川口さん起草のこれらのア  
ピールはいずれも格調高く、全国の心  
ある活動家を励ますものとなりました。  
「I国鉄をよみがえらすために―  
1987年3月31日を総決起の日とし  
よう」「II日本労働運動の階級的伝統  
を守るために―1987年11月19日  
を総決起の日としよう」「III京都総評  
の強化・発展と日本労働運動の前進を  
めざして」の各全文は、川口是遺稿集  
『長いものより一寸長く』(1993年、  
文理閣刊)に所収されています。

社会党・総評における川口評に比  
し、共産党側では「川口の頑固はこり  
ごり」の評が執拗でした。共産党は当  
時は「革新統一」にまったく関心がな  
かったかあきらめていたかのどちらか  
だったということでしょう。「社会合  
意」論の全盛、反共労働戦線の機運  
の高揚の中で、確かに「革新統一」の  
展望がなかなか見えにくいという事情  
は理解できますが、川口さんの「社共  
共闘」の「可能性を探る」努力に水を  
差すべきではなかったと思います。本  
来「知事選候補」は使い捨てたりして  
はいけないのに、次期候補の選定に当  
たっては、川口さんに声を掛けようと  
しませんでした。私はその「失礼」を  
忘れることはできません。それどころ  
か「川口さんでもう一度」と、次期候  
補者に川口さんを推薦しようとする労  
働組合があると、それを「つぶし」に  
かかる動きさえありました。川口さん  
は声が掛ければ再挑戦する意思はあっ  
たと私には思われます。もちろんそ  
の「挑戦」は「革新統一」を粘り強く  
実現するという作業を続けるというこ  
とですが、川口さんは「どういう事態  
になろうと対応できる」という立場を  
保ち、「要請を受けていたいくつかの  
大学からの教授職就任要請」を断り、  
正規の就職はしませんでした。別の人  
で「統一」が実現することがベストで  
すが、そうでない場合をも「覚悟」し  
ていたと思われまします。思い起せば78  
年「杉村選挙」において京大法学部の  
現職教授を蜷川さんの推薦があったと  
はいえ、各界連絡会総会で「推薦」す  
る役目を各界連・共産党のトップから  
要請されて果たしたのが川口さんでし

た。その「推薦した責任」を果たすべく、選挙戦に入ってから杉村さんの府下への講演にはほとんど同道していました。しかも「有給休暇」をとって。同じ教養部の川口さんをよく知る人々の間では、「川口さんは大学を辞めて杉村さんの応援に全力を傾けるのではないか？」という心配がありました。幸いそうならなかったのですが、彼の「責任感」と「覚悟」は、しばしば周りをはらはらさせるものがありました。このような経過を知るものにとっては、86年選挙を前にして川口さんが取った「筋を通す」さまざまな行動は、川口さんらしいもので、私たちにとっては良く理解できるものでした。

川口さんが大阪経法大法学部教授に就いたのは結局5年後の87年でした。とにかく「筋を通す」人でした。

## 5. 川口さんの統一戦線論と

### 今昔

川口さんの「革新統一論」は徹底したもので、「社会主義段階における統一戦線」論ともいべき問題について、1990年4月16日付の「赤旗・論壇」に「社会主義と複数政党」と題して投稿していました。社会主義国家においても、社会主義憲法を実現するための権力構造は「統一戦線」をベースにおくべきだというものです。1990年に入って、ソ連や東欧諸国が「民主主義と政治的複数主義」に関して、「社

会の発展はさまざまな政党の結成を排除しない」として、複数政党の存在を容認する「政治綱領」を掲げたのですが、実際の政治においては、「反対派排除」を行っていました。その状況に対して、川口さんは、「複数政党制の問題は、社会主義にとって『排除しない』とか『両立するもの』とかいうよりは、『必要なもの』であり『欠かせないもの』である」とみるべきだ」と述べ、「社会主義憲法は、社会主義の実現をめざす政党（複数）にとっては一種の共同綱領であり、大きな目標としてはそこで一致しうるが、その具体化や実現の道筋についての考え方の違いは、それぞれの党の主張に対する国民の支持・選択によって決することにしなければならぬ。」と政党間の矛盾の処理の方法まで提起していました。これは今日、「野党共闘」が政権運営にあたり、安保、自衛隊などの基本政策で一致できない党とは「政権」を組めないとする一部の人々への強力な反論となっているのではないのでしょうか。政権内で重要な意見の違いが出たときは「世論調査」を基準に政策の採否を行っていく道があるということ

秘密保護法」、2014年「集団的自衛権行使容認・閣議決定」、2015年「戦争体勢作りをめざす安保法制」、そして今年2017年「共謀罪」と次々に反動的法案が強行採決・実施されてきました。その目標が「憲法改正・9条改廃」であることは明らかです。圧倒的国会勢力配置の中で、それでも現在「憲法改正」を阻止し得ているのは、まさに市民運動と立憲4党の提携です。「改憲ハードルを下げるため」として「改憲勢力国会3分の2超」を背景に、国民世論過半数を狙って、安倍政権が次々に提起してきた「96条改正先行」論「緊急事態項目加憲」論「9条2項を残しつつ第3項追加」論と次々手を変えたるたびにその目論見が暗礁に乗り上げてきたのは、国民世論によるものです。それを作り上げてきたのが、「野党は共闘！」と突き上げる市民運動でした。野党最大派の民進党が憲法、原発、増税、野党共闘をめぐって「揺れている」状況の中で、辛うじて立憲4党が「共闘・提携」を持続できているのは市民運動の力です。かつては知識人・文化人のニカワによって「社共」が辛うじて単発的に共闘していた状況と違い、国会前集会を先導してきたシルズ（自由と民主主義のための学生緊急行動）の若者たちやそれに共鳴する女性団体・高校生組織に「学者の会」メンバーや「戦争させない・9条壊すな！総がかり行動実行委員会」などの市民運動組織

が持続的に行動してきていることが特徴です。これは全国的な運動の発信地ともなっています。とくに2015年安保法制反対運動における運動の高揚を受けて、2016年2月19日、野党5党首は国会内で会談し、「安保法制（＝戦争法）の廃止」や国政選挙で最大限の協力を行うことなど4項目で合意したことは画期的でした。そして参議院選挙を前にした6月7日、市民連合（安保法制の廃止と立憲主義の回復を求める市民連合）が民進党、共産党、社民党、生活の党の野党4党と「政策要望書」を交わし、野党共闘を前進させ、参院選で自公を少数に追い込むために力をあわせることを確認する事態に進みました。その結果、参院選挙では32の「1人区」すべてで「野党共闘」が成立し、統一候補が1人当選するという画期的な成果を生み出しました。

2011年3月11日は、この日を「新しい」日本の起点と考えようと、しばしば1945年8月15日に譬えられます。まさにさまざまな点で「再出発」の機運をもたらしました。とくに「原発に頼らない明日」をめざして日本全体が一度は舵を切ったかに見えました。共産党も「原発からの段階的な撤退」論から「即時原発ゼロ」を実現する「路線への転換を行いました。世論から「大歓迎」を受けました。さらに共産党は、参院選挙1人区で、「必要があれば独自候補を下ろす」などの「大英

## 藤沢薫 『わが芝居人生』

「俳優にして演出家の劇団「京芸」前代表・藤沢薫さんが、8月18日になくなった。1931年滋賀県に生まれて、享年86歳だった。葬儀の折にいただいた藤沢薫著「わが芝居人生」のBOOK紹介をつうじて、故人をしのびたい。葬儀会場で流れていた藤沢さんの朗読が耳に残っているうちに――。

## 芝居の出会いと芝居の虜に

芝居をやるようになったのは、本当の理由はわからないと藤沢さんはいう。龍谷大学の学生時代にやりたいことが見いだせずに退屈していた藤沢青年。お寺の二男坊に生まれ、仏教系の大学に入った「真面目人間」だったから、敷かれたレールを脱線しなくなったのか、はたまた途中下車をしたのか、何気なくのぞいた演劇部「実験劇場」の部室にそのまま気づけば居ついてしまったのだ。芝居というよりその仲間にもせられてしまった。しかも最初に魅せられた芝居は、京都美術大学アトリエ座が上演した京芸の岩田直二演出の『夕鶴』だった。

余談だが、わたしの中学時代の同級生に、ブドウの会の山本安英さんの姪っ子にあたる舞台女優さんが母親という友人がいた。

テレビに出ているきれいな女性とデパートの和服売り場の女店員さんのイメージが一致しなかった。スポットライトを浴びる新劇の世界で蔵がたつのはマレと笑われた。



藤沢薫氏

## 耳に残る葬儀会場で流れた朗読

## 役者稼業の浮き沈み

おおまかにいうと、劇団「京芸」の前史は、戦前のプロレタリア演劇運動の「青服劇場」と戦後の職場演劇部の「自立演劇集団」がレッド・パージを経て、合体したものと見えよう。

1953年に大学を卒業して入団した藤沢さんは、劇団「京芸」の初めての大ヒットに遭遇した。京大の演劇グループ「風波」（戸浦六宏主催）が上演した革命中国の老舎原作の「龍鬚溝」（改題して「北京のどぶ」）を、後年には東映時代劇の悪役スターとなった京芸の吉田義夫が見て感激し、岩田直二演出・戸浦六宏舞台監督で全国興行するほど好評を呼んだ。その後、藤沢さんは移動公演の苦労とカーテンコールの喝采の落差が大きければ大きいほど病みつきになっていった。それでも、移動公演などでは、片道切符の出たとこ勝負、三度笠の渡世人のように一宿一飯の恩義にありつけなければ、持ち歩いてくる芝居の出し物が喜劇でも、役者生活の舞台裏は悲劇的で劇団員の入替わりは激しかった。

## 見果てぬ夢のまた夢

「絶対に、自分の息子や娘には読ませたくない、ましてや孫の目にふれるところにおいてはいけない、役者バカ」の『妖の書』である。芝居は見るだけにとどめておけ、況や、役者稼業おやそれが読後の感想文である。藤沢さんの通夜の葬儀場で流れていた朗読が耳朶にこびりついてしまった。それほど存在感のある役者だった。劇団「京芸」50周年の記念講演「文殊九助」（西口克己原作・尾川原和雄脚本・岩田直二演出）で藤沢さんは、直訴のリーダー九助を演じたが、役者が背中であ技をするのを初めて知った。（佐藤和夫・京都の民主運動史を語る会世話人）

断」を行い、社民系の団体や市民運動との距離を大きく縮めました。共産党の「柔軟性」は特筆に値するものだったと思います。

泉下の川口さんは参院選1人区11人当選をどう受け止めたのでしょうか。その画期的結果を喜びつつも衆院選・（小）選挙区での共闘こそが本番だと厳しく訴えることでしょう。ただし川口さんは1996年実施の「小選挙区制」は経験せずに死去しました。「小選挙区制は民意をゆがめる。廃止すべきだ」と主張しつつも、「当面」は「革新統一で勝とう」、「全力を注げ」と訴えるに違いありません。

民進党は明日9月1日に、辞任した運動代表の後任の選挙を行うことになつていますが、今年4月5日付「民進党ニュース」で「野党4党と市民連合との意見交換会で基本的な理念、政策的な方向性の共有を確認」と報じたことを忘れないでもらいたいと思います。下記にその続きを引用しておきたいと思えます。

「民進、共産、自由、社民の4野党は5日夕、『市民連合』（安保法制の廃止と立憲主義の回復を求める市民連合）との意見交換会を国会内で開催。野党4党がまとめた『市民連合が実現を目指す政策』に関する4党の考え方を確認するとともに、直近の課題である森友学園疑惑の真相糾明と共謀罪の廃案についても共に闘っていくことと一致した。」（8月31日脱稿）

# 「嵐の中の赤いバラ」

山本宣治（やません）と蜷川虎三

佐藤 和夫

〔療原〕編集部員

お芝居のはじまり、はじまり

1冊のパンフレットを見開いたら、1通の封筒がしおりがわりに挟んであった。俳優座と劇団民芸などが上演した山本宣治の壮絶な生涯をえがいた「嵐の中の赤いバラ」の公演パンフレットだ。監修・西口克己、脚本・土井大助、演出・永井智雄、美術・園良昭、音楽・いずみたく、（一部略）、制作・八田満穂で、山本宣治を演じたのは竹内亨で、宣治の父亀松は、松本克平だった。

公演パンフの冒頭には、「偶感」と題して、西口が一筆したためていた。

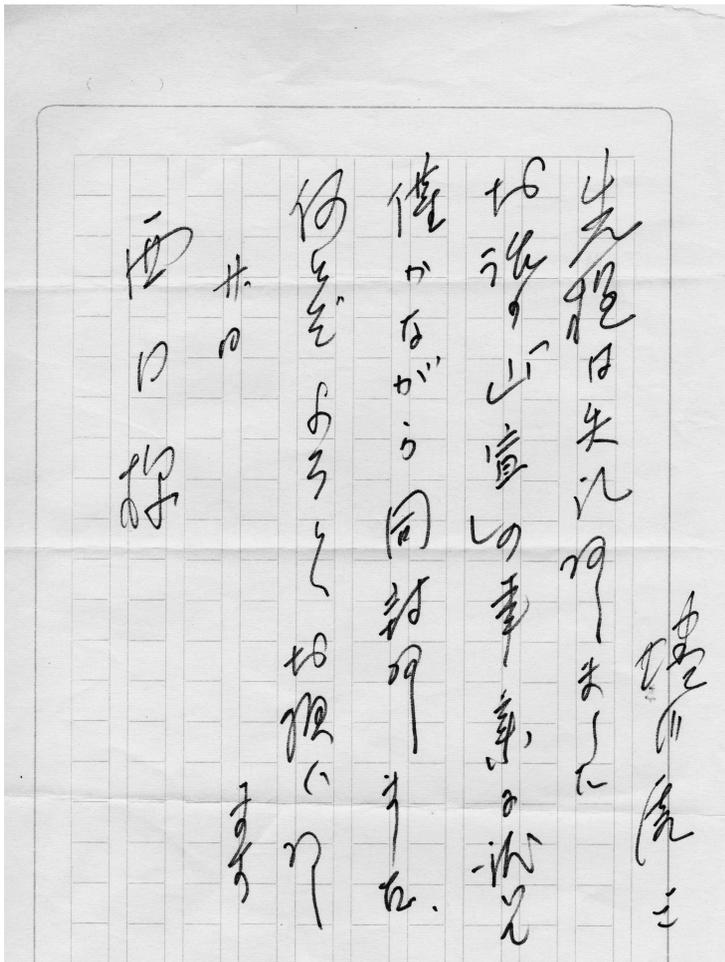
「私たちがいま（山宣）の芝居を観ようというのは、孤立しながらも生命を賭してたたかった山宣の精神を観るためである。」とし、「ここに小さいながらも一つの芸術的団結と統一戦線がある」と記し、芝居の成功を祈っていた。

演出家・永井智雄の  
上演に託した思い

この山宣の芝居の上演にあたり、永井の自分史が一部かたられていた。はじめ山本宣治の墓参りをしたのは、「僕が学生運動で治安維持法にひっかかり（補注・S9年2・15日検挙3・30起訴、

共青同盟神戸市委員長・本名飯沼修）、神戸・大阪の未決拘留所から、執行猶予で出てきてからです。昭和十年以後になるでしょうか。当時の京都―「京大事件」のあとの沈滞期でありましたが、軍国主義が次第にエスカレートしていましたが、平和と自由を求める学生・教師たちの抵抗は、なかなか根強

いものがありました。そして、将来にそなえて学習運動は地道に行われ、学生・教師たちの反ファシズム志向は、さまざまなかサークル活動となって、実を結んでいました。ぼくは執行猶予の重荷を背負いながら、京都の劇団（補注・エラン・ヴィタールについては、松本克平「日本新劇史」参照）で芝居



のけいこにはげみ、同志社大学に通いそうした学習サークルに非合法に参加していました。（一部略）山宣さんのお墓にお参りして花をそえたのも、こうした仲間たちといっしょでした―当時から「資本論」の邦訳にとり組まれていた、長谷部文雄先生もいっしょだったことを憶えています。」と書いて。そして、「表面的な『平和』のなかで、山宣の時代とよく似た黒い影が見えかくれています。この影を見落とすと、ぼくたちはまた暗い谷間につきおとされることになります」と山本宣治没後50周年記念講演の意義を語っていた。1979年の京都労演の11月号で、京都府立文化芸術会館で「山宣」上演実行員会主催の12月22日23日の2回公演を宣伝していた。1980年2月号で、「山宣」記念公演は950名の入りで大成功と報じた。

治安維持法と虎さん

1981年3月8日号・「赤旗日曜版」に西口は「強烈な『慈力』の持ち主」という蜷川虎三前京都知事の追悼文を書いた。「そういえば、いつか私が『山宣』のための寄付をお願いしたときも、あとで自分のポケット・マネーをそっと封筒に入れて、三十万円下さった。それを私は、いま全国公演中の山宣劇『嵐の中の赤いバラ』のために寄付した。」（写真参照）

虎さんの磁力線と西口克己とのかわりもさることながら、治安維持

法犠牲者である山宣にひとかたならぬシンパシーを感じていたからではないか。蜷川スクールの大橋隆憲（統計学者）は「日本の統計学」（P230）232・法律文化社刊・1965年）で次のように解説していた。

戦時中、虎さんは京大経済学部で統計学・会計学・東亜資源論などの講義をしていたが、しかし最後まで労働価値説の立場を崩さなかった唯一の教授であった。1937年当時

には、特高警察は蜷川虎三を検挙しようとした機会をねらっていたという。1940（昭和15）年ころでも、院生たちとヒルファードディングの「金融資本論」の研究会をしていたが、これがばれば治安維持法違反容疑

で検挙の口実になりえた。まさに山宣の刺殺は人ごとではなかったし、1950年のあの「反共は戦争前夜の声」演説は、肺腑からほとばしり出た「日本の民主主義を守れ」という磁力線だった。

## 研究ノート

# 京都婦人同盟の成立と女性たち

## ② 京都婦人同盟の出発

井上とし

（女性史研究者）

## 解散に関わる異論

前回①（231号掲載）に東京での関東婦人同盟の経過を記した。

同盟書記長であった田島ひで『ひとすじの道』（1968年）を主とした参考資料にし、婦人同盟の性格を決定づけた福本理論の持ち込みを挙げていたが、同じく参加していた山内みなちの『山内みな自伝』（75年）は、「私たちはもともと大衆団体についての常識を持っていた」と否定している。そして「準備活動のなかで、労働党支持一本にしぼるよう指示されて、中間派は離れ」ていったという。誰が指示したのか。

また、福永操は『歴史評論』1974年3月号に「関東婦人同盟の解散の事情」で当時の共産党や女性活

動者の状況を説明し、「終始一貫して

関東婦人同盟の『指導権を握る』者は、党の指導部そのものであったことは間違いない事実だったのです」と書きながら、解散時の指令については「謎」という。いずれもが田島ひでに対し批判をしている。1927（昭和2）年末、福本失脚後の共産党は体制を立て直し、二七年テーゼに従った「当面の諸政策にかんするテーゼ」を作成し第6章に「婦人対策」をあげ、コミンテルンの方針に従って婦人特有の組織を作ることを禁じた。これによって婦人同盟は解散となる。この種の戦前の資料や幹部の文章は、現在のジェンダー視点から再批判したくなるような相当おかしなものである。統一的な婦人組織を作るのが困難な原因は、まず内部に、指導部の男性の考え方にあったといわねばならないようである。

## 京都婦人同盟の出発

もう一度、初期の1926、7年ころに戻って、京都での動向を探ってみたい。京都は労働党が有力であり、その影響下にあった京都地方評議会の線でも働きかけられた。例の婦人部論争の中で京都地方評議会は25（大正14）年10月には婦人部設置を決めている。だが進展のないまま、27（昭和2）年になって全国組織化の動きが具体的にわたったのを受けて、同年8月京都地方婦人同盟創立準備会の名で檄文が発せられた。長文だが、当時の女性の置かれている状況を訴えるものとして読んでほしいと思う。

「姉妹たちよ、私達は家庭から出て朝早くから夜おそくまで会社

や銀行や商店や病院や或いは工場

で働いてゆかねばなりません。私達の尊い勤務と労働で多くの仕事はこび、沢山の品物がつくり出されるのに、私達はいつたいどんな待遇を受けているのでしょうか。銀行や会社や商店では上役や監督の目を浴びつつ夏は扇風機に遠いところで、冬はストーブもない部屋で、毎日機械のようにひどい仕事に耐えてゆかねばなりません。私達管々と勤労する女性はどうなところでどんな風にして働くにしても、長時間の労働と男よりもずっと安い給料と不完全な設備と過酷な取締りに苦しめられていることは、みんな同じです。しかも女であるがためにいわれなき侮蔑と嘲笑をうけることは、私達の苦痛を二重にも三重にも耐えがたいものになります。耐えかねてチヨット不平をいえば冷酷な臍首は忽ち見舞って来るし、それでなくてさえ今日の不景気は日夜背後からソラ解雇だ失業だと私達を脅かしています。

さらに工場に働く私達の姉妹はどんなにひどい労働を毎日毎夜つづけていることでしょうか。不衛生な塵埃だらけの工場で十何年も働かされて、おまけに深夜業までも強制され、疲れて病気をしても診療所はロクに手当もしてくれず、産前産後の十分な休養もなく働けなくなれば蚊の涙ほどの手当で追い出される。仕事がすんでも監獄のような寄宿舎に閉じこめられて外出・面会の自由もロクすつぽない。そういうひどい虐待に姉妹は日夜呻き苦しんでいるのです。

こんなひどい圧迫に耐えかねて私達は今までかけて不平も不満もつぶやいていました。しかしそれでは私達の生活は向上しなかつたし、また決してしないのです。どうしたらもっといい生活が出来るようになるか？ それには私達が一人一人でなく虐げられている全婦人が結束して集団の力でもって共通の要求をおし通すよりほかに途がないのです。

その団結の機関こそわが婦人同盟です。私達はさつきいったようなひどい圧迫に苦しんでいる。しかも不平も不満も表す手段も訴える手段も現在持っていません。否、かかる機会も私達には与えられていないのです。参政権や政党加入の自由は私達婦人には全然ない。それは現在の政治や法律が私達を

愚弄嘲笑して、いつまでも奴隷のような地位に縛りつけてチヨットした要求も言う機会を与えないがためなのです。

そのほか私達女性をふみにじる公娼制度は公認されており、いったん結婚すれば家長へ絶対服従を強制され、離婚の自由も与えられていない。尊とかるべき母性を保護する法律も婦人労働者を保護する法律もない。教育の機会均等は奪われ私達はいつまでも無知の泥沼に眠りこませておこうとする。

さらに今日なお私達女性のほとんど大部分は家族制度の美名の下に家庭内に閉じこめられ、家事、裁縫、台所仕事にすべての時間をうばわれています。しかもそれ以外のことには女が手を出すのは生意気だとされ、社会の大部分もまたこういう考えに慣らされています。何という屈辱でしょう。婦人が婦人みずからの事に関して発言し主張し行動するのは当然ではありませんか。

婦人同盟はこういう婦人にたいするあらゆる圧迫を排除して、婦人にたいする政治的、社会的自由を確保し、経済上の地位を向上せしむることを目的とするのです。こういう困難な、しかし偉大な婦人解放の運動は今や虐げられているあらゆる婦人が手を握り力を合わせて行わねばならぬことで

す。今まで圧迫に泣いて来た私達はこぞって婦人同盟の旗の下に集まり、婦人解放、男女の社会的不平等排除の輝かしい首途を出発しようではありませんか。

もうすでに東京でも大阪でも静岡でも私達の姉妹は勇敢にたたかっています。

京都における姉妹よ！ さあ暗き過去の生活から雄々しく立ち上がり、しっかりと団結しましょう。そのときはじめて私達の生活に光が来る。

虐げられたる女性解放の上に輝きあれ！  
婦人同盟にこぞって来り投ぜよ！

『京都地方労働運動史』 1959年、429頁)

女には、確かにこのような時代があった。ただ男という性に生まれただけで優位が許された時代が。

この檄の執筆者はわからないが、評議会中央委員会から「婦人運動に関する意見書」、結成後には「婦人同盟の旗の下に！！」などの文書が全国に発せられていたので、それらを下敷きにして京都で書かれたものである。ここに漂う怨嗟、憤懣の情感からして女性であろうと感ずる。

## 『燎原』の合本「電子ブック版」発売中！

CD-ROM版 各巻頒価 3000円 (送料共)

- 第1巻 (創刊号から第50号)
- 第2巻 (第51号～第100号)
- 第3巻 (第101号～第150号)
- 第4巻 (第151号～第200号)

\*ご希望の方は、事務局まで電話またはFAXでお申し込みください。

京都の民主運動史を語る会 TEL&FAX 075-722-3823 (井手方)



# 私の一期一会

「京大・滝川事件・1933年夏―それぞれの余波」

佐藤和夫  
(本会会員)



## 『学生評論』の廃刊となった1937年7月号の 齊木昂投稿・「ルネ・クレールの歩んだ道」をたどる――

プロローグ

「京大・滝川事件」は、京都においては「世界文化」（1935年2月創刊）・隔週新聞「土曜日」（1936年7月創刊）・「学生評論」（1936年5月創刊）を生む契機となった。特高警察により「京都・人民戦線事件」としてでっち上げられ、関係者の検挙によりいずれも廃刊となった。「学生評論」については資金難にあえいでいたとはいえ、それなりに継続していたのだが、1937年11月8日に発行人・草野昌彦の検挙により7月号をもって廃刊となった。その最終号の「学生評論」1937年7月号（6月発売）に一本の映画評論が載った。フランス映画の監督、「ルネ・クレールの歩んだ道」という齊木昂の投稿について、若干考察してみる。1931年の9月18日の柳条溝での鉄

道線路爆破事件からはじまった満州事変により、「非常時」の重苦しさが強まっていた。1936年の2・26事件を契機に軍部急進派と革新官僚は、国家総動員体制の確立を目指す「ファシズム化をすすめた。「大学はでなければ」の高等遊民とその予備軍は、ファシズムの危機にどう対峙しようとするのか自己模索していた。「社会ファシズム論」の呪縛にとらわれていたもの、コミンテルンの「人民戦線論」への転換に希望を見出そうとしていたもの。差し迫る破局の1937年7月7日の盧溝橋事件を発端とする日中戦争の全面化を前にして、もう一つの「転形期の人々」をフランス映画に仮託して、齊木昂はこう切り出す。（補注：草野昌彦が主宰した『学生評論』を復刻する会が、1977年に白石書店から復刻版全三巻を出版したが、その月報でもペンネー

ム・齊木昂の本名は判明していない。編集人草野が特高に自供せず忘却したのか、はじめからペンネームのみで採用し本名不明のままだったのか。当時、編集をしきっていた永島孝雄は検挙されたが、自供せず事実上獄死した。）

### 1、なぜ「ルネ・クレール映画」 なのか？

「ルネ・クレールのトーキョー作品は、だいたい二つの異なった傾向に分類できる。一つは『パリの屋根の下』『巴里祭』の様な抒情的傾向であり、他は『ル・ミリオン』『自由を我等に』『最後の億万長者』『幽霊西に行く』にみられる様な多少の風刺的傾向である。この抒情性と風刺性の二元的傾向は我々にはハイネを想起させる。」と齊木は冒頭に指摘する。「この二元性はクレールがゲエテの様に外的世界に対して二重の態度をとった事を意味せず、むしろハイネの場合の如く、盾の両面であったのである。何故なら、純粋な抒情詩人は資本主義社会の俗物性と激しく衝突せざるを得ず、その衝突は必然的に諷刺への方向を辿るだろうから。」と、ルネ・クレールの作品論を展開する。抒情性と風刺性のこの二元的傾向は、「外界が彼の個性を現実的に圧迫するに至るや、彼は之に対して何等か積極的に反発せざるを得なくなる。この反発は浪漫主義への逃避やその他様々の形を取るものであるが、その際に彼の眼が自らの個性を圧迫する社会そのものへと

向けられ、その社会の矛盾の洞察へ多少でも近づいたとき、彼は風刺の矢を以て、かかる矛盾に辛辣な攻撃を加えるに至る」とし、「こうした抒情的傾向から諷刺的傾向への発展を我々は今、我々の研究の対象であるクレールに於いて見出すのである。」と彼は思い入れたっぷりに解説する。

### 2、いわゆる「パリ三部作」を 中心に

第一の「巴里の屋根の下」（1930年4月制作・同31年5月日本公開）はパリの場末が舞台の恋愛劇だ。パリの裏町の人のいい艶歌師（シャンソンの楽譜を売る―補注）アルベールとルーマニア系の美女ポーラとの出会いと別れが縦糸。「泥棒でたかりの親分」のフレッドがポーラを口説きダンスのおりに部屋を盗んだため、ポーラは夜の街をさまよい、アルベールと偶然に出会い、彼の部屋にこもりこむ。そのアルベールは預かり物が盗品だったという嫌疑だけで警察に留置された時、一本の煙草さえ分かち合う親友でありながら、関わり合いになるのを避けたばかりか、アルベールが思いを寄せるポーラと恋に陥ってしまうルイという横糸。結論は、アルベールはわずかな人間的な絆である、友人と恋人を一挙にうしなう。彼は孤独の中に取り残される。「クレール自らもきつと、純粋な芸術家の常として、この様な社会の様々なクズや、機構からの圧迫や欺瞞を体

験したに違いない。だから、クレールの主人公への同情—寧ろ共感—も、ひいては観客のそそぐ涙も、この不幸を如何ともなし得ない。否、むしろ観客は、クレール自らと同様、そこに映し出された自分自身の不幸の映像を見て嘆くにすぎないのだ。」と齊木昂は感情移入する。「なぜ、私たちはこんなどこまでも不幸でなければならぬのか?」と問いかけ、「この社会ではあらゆる不幸は、ただ『金』の欠乏から生じてくるということ、そして『金』が万事を支配しているということ」を認識して、かくて次作の「ル・ミリオン」(百万長者・1931年制作)がつくられる。

貧しいボヘミアン芸術家ミシェルが、偶然にも当たった「百万フラン」の宝くじを紛失してしまふ。なくした宝くじを探そうとするミシェルと借金取りたちのグルーブ、宝くじを盗み取るうとする泥棒団、泥棒を追跡する警官隊との争奪戦が、「金即幸福」を戯画化し、諷刺する。

続いて、「巴里祭」(1933年1月制作・同33年4月日本公開)は、タクシーの運転手ジャンと可憐な花売り娘アンナの恋のすれ違いがえがかれる。状況設定は「フランス革命記念日」のバリ。上流階級の人々の集まるレストランでは退屈極まるブルースと欠伸びと、うわべばかりの型にはまった礼儀作法が支配している。下層勤労者階級は、朗らかに、愉快に、活発に、おじいさんもおばあさんと踊り、子供たちも賑や

かにおどっている。レストランの支配人や給仕たちは、上流階級に卑屈につかえ、タクシーの運転手や花売り娘には横柄なのである。ところが、ジャンの友達のとつちよのタクシー運転手が、酔っ払いの金持ちと意気投合し、運転手が客席に金持ち紳士がタクシーのハンドルを握る「階級的な逆転の幻想」というエピソードを挿入するが、それも祭で酔っていた時の気まぐれでしかない。とはいえ、「金に幻滅したクレールは、再び恋愛や友情といった人間的な結合に救いを見出そうとしたのである」と齊木は概括する。

「ところで、こうした友情や恋愛といった人間的な結合や、既存秩序に対する人間的な反抗、いわば人道主義的、自由主義的な立場を大げさにふみにじるものが、このとき歴史の舞台に登場して来た。それはドイツにおけるファシズムの勝利でありナチスの文化破壊工作であった」とし、ナチスの政権獲得後に、クレールはファシズム独裁を正面から批判した「最後の億万長者」(1934年)、「幽霊西へ行く」(1935年)と制作をつづけた。その上で、齊木はこの投稿の結論を述べる。「かくして岐路に立つクレールが今後いかなる方向に自己を発展させてゆくかは実に注目すべき事ではなくてはならない。なんとすれば彼は退いて自己の魂を売り渡し、妥協の泥沼に陥るか、進んで新しい世界観に立つか、兎に角、従来の個人主義的世界観の清

算に迫られているからであり、かかる矛盾は同時に現代に於けるあらゆる良心的な芸術家およびインテリゲンチヤをも亦とらえているところの矛盾であり、而も彼らも亦クレールと同じく、現実の情勢の逼迫、先鋭化によって、かかる二者択一に迫られているからであり、既に反ファッショ、文化擁護の道程を経て後者への途を敢然として選んだものが少なくないからである。」

投稿の終わりのP38のスペースには、世界史の「七月の暦」が1日から31日までどんな事件が起こったかをコラムとしてのせていた。縦に細長い紙面の目立つ14日目は、「フランス革命勃発—バスチーユ陥落(1789)。」つまり、革命記念日「巴里祭」への思い入れを、「学生評論」の編集人たちは学友諸君に求めていたのだろうか。映画「巴里祭」の原題は、「7月14日」だった。

### 3、そもそも、「学生評論」は、何を目指し、何をかたろうとしたのか。

1933年の滝川事件後、京大の新聞部に対する大学当局の干渉に抗議し、関原利夫、篤信正、姉齒仁郎、三輪勝治らは、1934(昭和9)年にしめし合わせて脱退し、また京大滝川事件の運動主体となった出身高校別高代会議関係者が出身別高校別の同人雑誌を出す運びとなり、両者が合流し編集を担当することになった。編集スタッフには各高校別同窓会代表として

長尾孫夫(高知高)、藤谷俊雄(高知高)、永島孝雄(広高)、岡田各五郎(四高)、岸本英太郎(六高)らが加わり、1936年5月に発足した。1937年3月に、関原、藤谷、長尾らの卒業で、永島孝雄、西田勲、布施壮生、内海省三、小野義彦、草野正彦らが引き継いだ。「発刊の言葉」で「無智と迷蒙(ママ)と強権とが支配した時代は決して『文化』を生まなかった。真理は泥に塗れ、恐しい『野蛮』のみが大手を振って歩いて行つた。現在『野蛮』への道を開くか『文化』の大通りを探し求めるか、このカースティング・ヴォト(ママ)を握るもの一人は学問に携る学生インテリゲンチヤであろう」と「学生評論」発行の意義を位置づけた。結果として最終巻となった1937年7月号においても、国内カレッジニュース欄では、「上申派の蠢動続く」(同志社)、「学級委員会の結成」(関西大学)、「学制改革実施さる」(立教大学)、「文化部の統一戦線」(関西学院大学)、「日本精神塾の誕生・席取競争の熾烈化」(神戸商大)、「研究会誌の発行」(東京商大)、「浜田博士の総長就任・学友会改善調査委員会案可決さる」(京大)、「文化誌の増大発行」(法政大学)、「成城時報弾圧さる」(成城高校)、「工科学生の読書傾向」(東京工大)など学内動向を取り上げていた。さらに、5行の「学生評論」欄では、○「去る五月二十六日、吾国に珍しい一つの催しが京都で行われた。主催者は之を『学生祭』と呼んでいる。

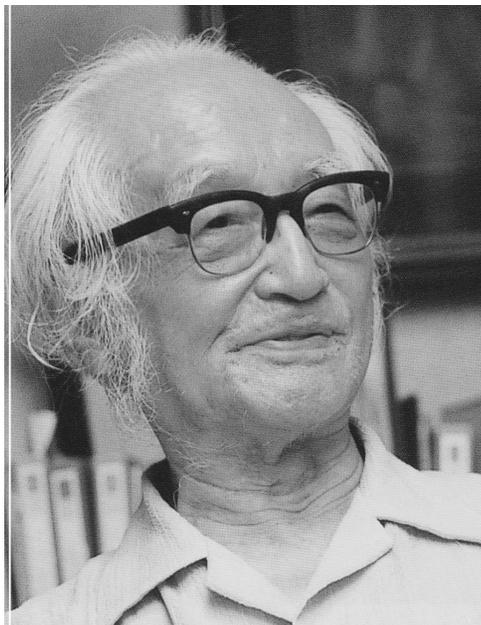
『いびつにされた魂を、かたくなな心を解きほぐして、明るさに向かって手を差し伸べよう』というのがその主旨である。○「この試みに対して、各方面から少なからぬ賛辞が呈された。だが、その中で松井前京大総長が『時宜に適す』と賞賛したことは、誠に時宜に適合している」○「四年前の五月二十六日―それは滝川事件勃発の日であり、合理主義の記念日である。歴史は忘却されてはならない。」(補注・まさに、学生評論の創刊の意義は、滝川事件をつうじて、「大学の自治」「学問・研究の自由」などの問題提起の継承と全国的な認識の共有だった。)

○「もしあなたが、病院や美術館や民衆街や戯れ遊んでゐる子供たちの上に爆弾を落とすてゐる彼らに反対しなければ、あなた方もまた遅かれ早かれ、それと同じ運命を負わねばならないだろう」○「ロマン・ローラン(ママ)は世界の良心に訴えて、スペイン反革命軍に抗議する」と論じ、「ローランの言葉が、いつの日にか吾々の上に実現されぬと誰が断言できよう。」と警鐘を鳴らす。全国の学生運動の協働をめざし、かつ合理主義・人道主義・民主主義を守り、非合理主義・官僚主義・ファシズムに抗する人民戦線的な試みを指向しようとしていた。まさに、日中戦争の全面化に対する反戦意識の結集が当面の課題だった。文部省をはじめ学校当局や特高警察が恐れたのは、学生運動の反軍事教練闘争から反戦闘争への発展に他

ならなかった。特高によってフレーム・アップされた「京都人民戦線事件」とは、未然形のうちに弾圧する「予防反革命」そのものだった。

### 余波・その1

1933年5月28日、京大・滝川事件に連帯を求めて京大から学生代表が上京し、それぞれの出身高校別の代表者からなる「高代会議」を組織し「大学の自治・学問の自由」を求める共同闘争を訴えた。はやくも6月3日には、第一回のその高代会議が開かれた。その中間の5月30日、東京帝国大学のあゝ森永製菓2階の喫茶室で三高出身者の「文学部新入生歓迎会」と銘打った集いが、十名程度でひらかれた。店員から無届集会として本富士署に通報され、二人の刑事に踏み込まれた。参加者は学生証の提示をもとめられ、津吉英男(文学部西洋史料)と西海太郎(同)が、その場から連行された。北條元一(ドイツ文学)と西口克己(西洋哲学)、新入生の市川米彦(西洋史)田宮虎彦(国文学・帝国大学新聞社)らは、学友の連行をただ茫然と見送った。なぜ、彼らふたりが目をつけられたのか。西海は4月22日の京大・



北條元一氏

滝川事件に抗議するピラを図書館3階の屋上から下の芝生の広場に派手に撒くなど学校当局や学校に潜り込んでいた私服刑事にマークされていたのだらう。また、津吉は共青メンバーとみなされていた。1933年5月28日に検査された西海太郎は、プロレタリア科学生同盟員として9月18日に、津吉英男は共産主義青年同盟員として8月29日に、それぞれ留保処分となった。特高月報の昭和13年9月号は、前年の「京都人民戦線事件」(1937年11月摘発)として、「世界文化」の配布先名簿を把握していた。そこに二人とも記録されていた。二人は滝川事件で留保処分だったが、反ファッショの初心は貫かれていたといえよう。

### 余波・その2

北條元一は6月17日の文学部学生大会、21日の法文経の学生大会に参加し

つつも、夏休みと共に運動が退潮する中で、無力感と厭世感と自己嫌悪におちいった。三年生になると卒論にレッティングの「賢者ナータン」を取り上げることに決めたが、「唯物論研究」に掲載された高沖陽造のレッティング論なども含めマルクス主義の文献をよみあさるも確たる文学観もなく、当時は人里離れた郊外の成城の下宿に引き籠っていた。1936年5月、就職運動に失敗したあけく東大文学部大学院進学。1937年7月、召集令状がきて、京都第16師団に赴くが、筋骨薄弱として即日帰郷。39年3月、教育召集、特務二等兵として入隊、数日後発病、陸軍病院入院。同年4月、病気のため召集解除により帰郷。一時重患となるが、後に回復して上京。なお、仕事としては、38年10月、王子製紙会社調査部嘱託、ドイツ語文献の調査・翻訳担当を45年9月までやりつつ、42年4月から45年3月まで、同級生の井上正蔵の後任として横浜専門学校でドイツ語担当の非常勤講師をしていた。その間、41年12月、京一中・三高・東大と一緒だった親友西口克己のいとこ西口さなえ(戸籍上の妹・西口克己の実母死亡後に実母の妹が父の後妻に直り、西口の養母となったが、その養母の連れ子)と結婚した。

### 余波・その3

北條元一(東工大名誉教授・芸術論・1912年12月生、2005年11

北條さなえさんの操り人形作品



老ファウスト



メフィスト



青年ファウスト



ものであった」とし、中世哲学を広く理解すれば、ギリシヤ的な哲学思想の流れとユダヤ・キリスト教的な宗教思想の流れの混交にあったが、ギリシヤ的な哲学思想傾向としてのグノーシス派を異端として、正統を確立する教父哲学が主流となった。「もつともそれ故に、もはや哲学はそれ自ら真なる絶対最高の真理ではなく、上からあたえられる信仰の内容を理解し説明せんがための方便的理論であった。ことにこの関係は後の中世において著しい。即ちかくしていよいよ厳然と信仰や教義が確立公認され更にこれらについての教父たちの説明方式までもが伝承の權威と名づけきた中世においてはその教会や修道院などの学校(スコラ)で教えられる哲学(スコラ哲学)は、まづ信じて然る後にこれを理解せんとする哲学であり、この哲学の理解するは信ぜんがためであった」という記述に、西口は赤い傍線を引いていた。おそらく、西口においては、不合理ゆえに我信ずという「スコラ哲学」を「天皇制イデオロギー」と読み替えて、コペルニクスの転回として卒論を唯物論の立場で書いたのであろう。1935年学生時代の卒論の準備で卒論の指導教官は「スコラ哲学批判」がアナロジイだったことに気づき、渋い顔をしたにちがいない。自由主義者右派程度といわれた出隆が、戦後に日本共産党に入党したのも抑圧的な「スコラ哲学」から自由なる思弁の「古代ギリシヤ哲学」の

した哲学はかくして党派的性格を露わにせねばならぬ」(1929年9月・「思想」第89号・岩波書店刊)とする唯物論哲学の本多謙三の影響もみてとれるのだが――。

1933年6月17日、文学部学生大会が400人ほどはいる29番教室でひらかれた。学生達は出隆助教の「西洋哲学史」の講義時間をさいてもらった。西口克己の蔵書に、昭和8年刊の「岩波講座シリーズ 哲学」として出隆の西洋哲学史概説第一部(古代・中世)の上中下三分冊がのこっていた。その(下)巻の第二編中世哲学(主として基

督教徒の哲学)に西口は注目した。すなわち、ギリシヤ哲学最後の哲学者プロチノスがAD3世紀にローマで活動したことは、思想上注目すべきできごとであった。もつとも、ギリシヤ哲学はギリシヤを征服したローマ帝国に継承されたが、そのローマ帝国はキリスト教化されてしまった。「ギリシヤ哲学は今ここでは基督教の理論支持者としてその教理信条として使用される地位――即ち基督教神学の奴隷たるの境遇――に置かれた。かかる地位にある哲学が普通に中世哲学といわれるもの、或いは一層厳密にはスコラ哲学とよばれる

ルネッサンスにあったかもしれない。

余談であるが、晩年、「墓地を買う」(「文化評論」1985年3月号)というエッセイを西口克己は書いた。宇治の「山宣」の墓のある墓地や宇治黄檗の宇治霊園などを車で見て回ったいきさつである。買い求めることとなった黄檗の地には、西口の選挙事務所事務長を一貫してつとめた親友が隣の区画を買い求めた。そして、ゆかりの人が墓参りに来たら生前の二人が碁盤をはさんで対局している姿が髣髴できるよう、それぞれが白い石と黒い石を墓石の周りに敷き詰める約束だった。この墓探しの車の運転手が、わたくし佐藤和夫だった。白い石は兄貴分の西口克己の方と承った。西口克己は何ごとにも碁に例えて「読み」を争っていた。(未完)

〈参考資料〉

- ①滝川事件東大編集委員会編纂「私たちの滝川事件」(1985年2月・新潮社刊)
- ②井上正蔵「私のシュトゥルム・ウント・ドラング」(1990年2月・新日本出版社刊)
- ③永井潔「私の大学」(2001年3月・本の泉社刊)
- ④北條元一「文学・芸術論」(2002年9月・本の泉社刊)
- ⑤岩井忠熊「十五年戦争期の京大学生運動」(2014年11月・文理閣刊)

月没)の「文学・芸術論集」(2002年9月・本の泉社刊)の著作年表では、1937年6月「ルネ・クレールの歩んだ道」(筆名・斉木昂、学生評論社『学生評論』第二巻第2号と記載されていた。)すなわち、6月21日の滝川事件に連帯する「滝川幸辰教授追放抗議学生大会」では、集会をとうまきにしていたにすぎない「東大三高5人組」のひとり北條元一が、「人民戦線映画」とカテゴリーされる映画に託して「自由を我等に」とマニフェストしたのだった。就職運動に失敗し、大学院に進み、1937年7月の軍隊への召集におびえつつ、24歳の生きた証を書き残すようにして書き上げたのが「ルネ・クレールの歩んだ道」だった。

## エピローグ

闘いは、局面ごとに勝ち負けが積みあがってゆく。特高警察が学生を検査し実刑をかし、転向を迫り上申書をかかせる序盤戦だけで勝敗が決するのではない。中盤戦をそれぞれの仕方と節を曲げず、思いを潜め、持久戦のように生き抜き、世界的な大局観をもって対局者たるファッショ権力に終盤戦で投了を迫るまで、囲碁に見立てて闘ったのである。「内なる根拠地」としての「京大・滝川事件」で培われた仲間意識やあらかじめ失われた「要石としての党の再建」への思いなど、それぞれの戦後の準備をはじめていた。つまり「滝川事件」から「天皇機関説事件」

を通じての国家総動員体制形成過程に對峙した学生たちは、それぞれの闘いの中で生死を掛けて成長していった。戦後の民主主義の担い手として、北條元一は後輩の経済学部卒の伊藤信一らと働きながら学ぶ総合誌「私の大学」の刊行や信州で菊池謙一の「人民大学講座」の講師活動に飛び込んでいった。東大における「滝川事件」で繋がった

人間関係が連珠となった。これが民科芸術部会運動となり、「世界文学研究会」というより幅広の文化運動に発展し、戦後民主主義の一翼を担っていった。「京大・滝川事件」における学生運動は一敗地にまみれても、それで終わりを告げずに伏流水となり、戦後の民主主義の担い手をつくりだしていったのだ。京都においても歴史的平行現象として、旧三高同期であり

りの屋根の下」の主題歌「ス・レ・トワ・ド・パリ」を一緒に口ずさみながら。「ええじゃないか運動」のように軍靴の音を忘れようと狂い踊る「東京音頭」に対して、それがささやかな冷めたレジスタンスだった。

京大の学友会改革をになつた佐々木時雄たちが裏方を務めた「人文学園」運動なども同じ地平からはじまったといえよう。京大・滝川事件の長い長い波長の余波といえよう。「昭五三高スト」や「東大における京大・滝川事件」に遭遇した東大三高グループとして、市川米彦(文学部史学科)、雪山慶正(経済学部)、古在由信(哲学者古在由重の弟)といった三高文乙グループ、北山茂夫、津吉英男、西海太郎などの史学科や藤本武、上田作之助、内海義男などの経済学部の三高グループたちとつながっていたのが、キーマン・北條元一だった。北條の

刎頸之友でもある東京高の近代委員だった井上正蔵も文学同人誌「新思潮」で三高出身の福岡孝成(仏文)と交流した。ルネ・クレールの映画「パリの屋根の下」の主題歌「ス・レ・トワ・ド・パリ」を一緒に口ずさみながら。「ええじゃないか運動」のように軍靴の音を忘れようと狂い踊る「東京音頭」に対して、それがささやかな冷めたレジスタンスだった。一方、北條にとって中学から同期でも三高二文クラスで文芸部に属し東大に入った親友から「心友」となった西口克己は、年下の一高中退の画学生永井潔などを相手に本郷の通称「落第横丁」界隈を飲み歩いてきた。討ち入り前の大石内蔵助のように特高の目を欺くための擬装や韜晦ではなく、「理論と実践の統一」を求めるマルクス主義におっかなびつくり遠望していたにすぎない。思想としてのマルクス主義に急接近していた井上正蔵や北條元一からみれば、西口克己はなお表面的にはニヒリストでしかなかった。しかし、「京大・滝川事件」は彼における「我」の自覚的な過程矛盾をらせん階段のように展開させ、本郷の通称「落第横丁」という停滞と見紛う「踊り場」から一挙に「唯物論者」へと爆発的に発展していった。人はそれを「突然変異」と断じて説明を回避する。しかし、「命がけの飛躍」の痕跡は、卒論の準備として始められた、1933年2月から1936年までの西口の「哲学ノート」にうかがえる。カントやフイヒテの弁証法から、一気にレーニン「唯物論と経験批判論」を導きの糸として弁証法的唯物論の探求をはじめていった。「かつて無前提と立場の排除を標榜



北條氏と、さなえさん

# 会員消息



## 兵庫の新興教育運動と大田耕士さん

田中隆夫（兵庫）

8月『朝日新聞 兵庫全域版』で「戦争と教育」5回連載の特集が終了しました。その第1回と第2回が、新興教育運動にかかわる倉岡愛穂さん、大田耕士さんでした。第3回は関西学院中島重、4回は姫路中学の軍事教練、最後が尼崎開明小奉安殿となっています。倉岡さんは共謀

罪との関係で取り上げられましたが、大田耕士さんは、今回が一般新聞で取り上げられるのは初めてです。兵庫の新興教育運動に直接かわりがありながら、東京転動後にプロレタリア漫画運動で検挙されたこと等があつて、治安維持法や新興教育運動関係で掲載されることがなかったのでは、と考えています。次女が東映動画に勤められている時に、動画労組書記長をされていた宮崎駿さんと結婚、アニメーターの吾郎君は、大田耕士さんの孫にあたります。

\*事務局に新聞のコピーがありますので、必要な方はご連絡下さい。

## 京都の民主運動史を語る会 11月例会

とき 11月26日(日) 午後2時～4時30分

ところ 京都市職員会館かもがわ

河原町竹屋町東入、石長旅館の奥

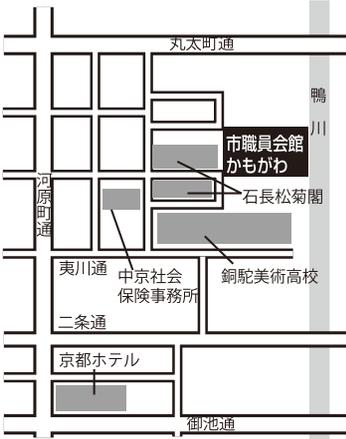
テーマ 60年安保闘争と沖縄

語る人 今西 一さん  
(小樽商科大学名誉教授)



「前回の例会で京大事件を語って頂いた今西さんに、今回は、50年代を沖縄に暮らし60年代に京大で学んだ沖縄近代史研究者・西里善行氏への聞き取り等を通して浮かび上がってくる沖縄と、60年代の京都の学生運動について語って頂きます。

例会は隔月に開きます。どなたでも参加できます。会員は無料。会員外の方は資料代300円。



## 「入会

岡田知宏(右京区) 松村満行(京丹後市) 中村好夫(長岡京市) 早川幸生(山科区) 奥西正史(伏見区) 出淵とき子(大津市)

## 「退会

今井和子・寺前巖・湯浅誠子・大平勲・高木陸郎・熊谷尚之・杉本喜代己

## 「死去

荒川重勝・山下茂

## 事務局より

・11月15日号に振込用紙を同封させて頂きます。連絡欄に未納となっております年度が分かるように請求させて頂きますので、送金よろしくお願ひします。

・ホームページは執筆者検索が可能とな

## 編集後記



▼8月2日、日本共産党の元衆院議員・中央委員だった労働者出身の政治家梅田勝さんがなくなられた。勇退後は「国領五一郎を顕彰する会」の会長や顧問などを務められ、89歳の生涯を閉じられた。なんといつても、1972年の中選挙区時代の京都一区で、谷善と梅田さんの複数当選は、1970年の嵯峨川府知事六選の当選に続く「日本の夜明けは京都から」のスローガンを実証させたものだった。

▼梅田勝さんの思い出など追悼記事の投稿求む。

▼その梅田さんが、1972年1月に「礎をきざした人」として、「国領五一

りました。せいぜいご利用下さい。

## ◆健し察図

◇「シチズンフォー／スノーデンの暴露」 9月23日(土・祝) 10時30分、13時30分、上映時間1時間54分、ウイングス京都イベントホール、映画センター会員料金1100円(当日料金1300円)

◇河二ホールの手作り映画会 「松川事件」 9月30日(土) 10時30分、13時30分、河二ホール。1961年公開、上映時間2時間、参加協力券1000円

◇世界報道写真展 10月3日(火) 12日(金)、立命館大学国際平和ミュージアム、参加費500円

郎」を書いていた。2017年7月、「国領五一郎を顕彰する京都の会」が、『国領五一郎—その人と生涯—の冊子を発刊した。発刊にあたっての目的は、彼の不屈の闘いに学び、安倍政権と右翼団体・日本会議の改憲策動を許さない大きな力とするためとしている。西陣文化センターの全西陣織物労働組合内の「国領五一郎を顕彰する京都の会」(会員外300円で購入可)まで。

▼それについても、訃報が続いたが、「道半ばに倒れた人も」「志を貫かれた人も」「後世の人々が、遺志を引き継ぐこと、一世代でやりおこなったことをあきらめない後継者をつくること、それが階級闘争史の本質だと思いをいたす「終活」の人になりかかっている今日この頃だ。今年の夏の暑さはほとほとこたえた。(たつ)